

ウェスレーの罪理解

国重潔志

はじめに

英国国教会の司祭ジョン・ウェスレー (1703-1791) は、18 世紀英国のメソジスト運動の指導者の一人であり、後のリバイバリズムやホーリネス運動に多大な影響を与えた人物である。彼は、本論集の主題である罪の教理について、何か新たな教理を展開したわけではなく、それまで、教会内にあった罪に関するさまざまな教理を、その置かれた状況にあって彼なりに統合していった。本小論文では、彼なりにまとめた罪の教理について概覧するとともに、その背後にあった思想にも触れつつ、東方教会も含めてキリスト教会全体での罪の教理に関する彼の立ち位置をとらえていきたい。

ルターやカルヴァンといったキリスト教会のタイタンと比べると、ウェスレーはあまりよく知られていないことから、まず最初に彼の生涯を簡単に辿りその過程での彼の罪の教理に対する関心に触れていく。続いて、罪の教理について彼の基本的な理解をまとめてみたい。

I. ウェスレーの生涯と彼の罪理解の発展

A. オクスフォードの回心 (1725)

ジョン・ウェスレーは、1703 年英国国教会の司祭の家庭に生まれた。厳格なピューリタニズムの教育の下に育てられたとはよく指摘されるが¹、基本的

¹ Robert Monk, *John Wesley: His Puritan Heritage* (New York, NY: Abingdon, 1966); John Newton, *Susanna Wesley and the Puritan Tradition in Methodism* (London: Epworth Press,

に彼は初代教会からエラスムスなどに見られるクリスチャン・ヒューマニズム²を大切にする国教會的靈的イーススのうちに育てられ、これが後の彼の罪観に少なからず影響を与えた。

1720年にオクスフォード大学クライスト・チャーチ・カレッジに進学し、1725年大学の助手として研究を進めるために国教會の司祭の按手を受ける備えをする中で、トマス・ア・ケンピスによる『キリストに倣いて』から謙卑の重要性を、そしてジェレミー・テイラーの『聖なる生活・聖なる死の規律と実践 (Rule and Exercises of Holy Living and Holy Dying)』から自らの心と生活のすべてが全知全能なる神の前に責任ある存在であることと見え³、靈的に覚醒したウエスレーはオクスフォードの回心⁴を経験した。この、神の前に責任ある存在たる人間という理解は彼の神学を生涯貫き⁵、これが彼の罪観に大きな影響を与えた。

ウエスレーはその後、短期間牧会に携わった後オクスフォード大に戻り、そこでロー (William Law) の著作に触れた。ウエスレーと同世代であったロー

1968).

² 藤本の研究によると、17世紀に興隆した「内的宗教」において強調された個人の宗教体験、実際的な道徳的な敬虔、真剣な靈性、修練と自己否定、そしてアルミニアン的に要求されている人間の意思と努力といったことをウエスレーは幼少期にその家庭で吸収していった。藤本満『ウエスレーの神学』(福音文書刊行会、1990) 7-12頁。参照 Frank Baker, "Wesley's Puritan Ancestry," *London Quarterly and Holborn Review* 187 (1962): 180-186; Gordon Rupp, "Son of Samuel: John Wesley, Church of England Man," in Kenneth Rowe, ed., *The Place of Wesley in the Christian Tradition* (Metuchen, NJ: The Scarecrow Press, 1976).

³ 「私の全生活を、その思いも、言葉も、行いもすべて神に捧げることを決意した。というのは、神と自我との間に中立というものではなく、私の生活のすべての部分が、神への供え物となるか、それとも自我への、すなわち悪魔への供え物となるかの、どちらかであるということを徹底して確信したからである。」John Wesley, *The Works of the Rev. John Wesley, M.A.*, Thomas Jackson, ed., 14 vols. (London: Mason, 1829-1831), 11:366. 藤本訳、藤本『ウエスレーの神学』17頁。なお、ジャクソン編によるこの全集は本小論文では、以降 *Works (Jackson)* と表記する。

⁴ 藤本は、このオクスフォードの回心を「彼の生涯の最大の意識革命」と位置づける。藤本『ウエスレーの神学』17頁

⁵ 藤本『ウエスレーの神学』17頁

は17世紀英国の「内的宗教」、あるいは「聖なる生活 (holy living)」神学を受け継ぐ者であり、キリスト者の生活とは人間の原初の完全へと回復される過程であると主張し、この世のすべての事柄を、来世への準備としての個人の聖化へ目的論的にとらえる⁶。ここで注意すべきは、救いを赦罪という法廷のイメージではなく、罪を病としてとらえ、救いを魂のいやしのイメージとしてとらえる考え方にウエスレーは惹かれたことである。ローも含め、英国国教會は東西の初代教会教父らへの関心は高く、東方神学において顕著に見られるいやしの角度からの救済観⁷はウエスレーの神学の中心テーマとなっていた。さらにウエスレーはスクーガル (Henry Scougal) の『人間の魂の中の神の生命』の

⁶ ローは、キリスト教とは「聖なる訓育過程であり、墮落した魂をいやし回復させ、我々の性質に、神とより一つになるような変化を起こし、高い次元の幸福へと我々を準備するためのものである」と述べている。William Law, *Christian Perfection*, in *Law's Works* 3:25. 藤本訳、藤本『ウエスレーの神学』23頁

⁷ 東方神学は、基本的に墮罪前の人間は無垢ではあったが完全では無かったと理解する。東方神学において、神の像 (the image of God) は神のいのちに生きることを指し、神に似ること (the likeness of God) とはその神の像が人間のうちに実現していく過程 (神化、deification) と理解する。この神化は神のいのちに連なることによって起き、人間は神に似ていくはずであったが、墮罪によって腐敗と死が人間のうちにいった。死は人間を大いに弱めはしたものの、恵みのすべてが取り去られたとは理解せず、神の恵みの招きに人間は応じ、神のいのちの交わりに再び入ることができると考えた。東方神学の「神化」については、現代の東方教会側からのものとして、Panayiotis Nellas, *Deification in Christ: Orthodox Perspectives on the Nature of the Human Person*, Contemporary Greek Theologians vol. 5 (Crestwood, NY: St. Vladimir Seminary Press, 1987); Georgios I. Mantzaridis, *The Deification of Man: St. Gregory Palamas and the Orthodox Tradition*, Contemporary Greek Theologians vol. 2 (Crestwood, NY: St. Vladimir Seminary Press, 1997). ロシアン・バプテストの背景を持つロシア系アメリカ人神学者によってまとめられたものとして、Vladimir Kharlamov & Stephen Filan eds., *Theosis: Deification in Christian Theology*, vol. 1, Princeton Theological Monograph Series (Eugene, OR: Wipf & Stock Pub., 2006); Vladimir Kharlamov ed., *Theosis: Deification in Christian Theology*, vol. 2, Princeton Theological Monograph Series, 156 (Eugene, OR: Wipf & Stock Pub., 2011). また西方教会側からの包括的なものとして Michael J. Christensen & Jeffery A. Wittung eds., *Partakers of the Divine Nature: The History and Development of Deification in the Christian Traditions* (Grand Rapids, MI: Baker Academic, 2008) などが手頃なアウトラインを提供している。